5　全体考察

今回、二つの授業での教師と子どもの発言を軸にして、学習言語の検討につながる言語の把握を行った。その際、教師の発言等については 22 のカテゴリーに分類し解釈を行った。また、子どもの発言については 15 のカテゴリーで分類し解釈の作業を行った。研究の当初から、これらのカテゴリーが存在したわけでなく、授業の一言一言のやりとりの意味について、発言の意図を踏まえて、まとまりの整理行った結果としての分類カテゴリーである。そのため、確実な範疇を有するカテゴリーとは言い切れないが、大別すると、教師側では、①授業遂行に関する言葉、②授業活動の指示、③発問・確認、④説明、⑤朗読の５分類になると思われる。また、子ども側から見た場合は、①授業遂行に関する言葉、②意見の発表、③音読の３カテゴリーになると思われる。ここは、今後の追検証が必要なところである。

今回の二つの授業の中で、とりわけ教師の説明が難しかったところは、「とてつもなく」という学習語彙の解説のところであった。教師は「すごく」「でっかい」「おおきい」などと一般的な用語を駆使して説明する一方で、子どもからは、「むちゃくちゃおおきい」「かいじゅうよりも」「うちゅうよりも」「うみよりも」「スイミングスクールよりもおおきい」など、自己の生活に密着した言葉が飛び出してきている。新しい学習語彙を生活言語で理解していく活動と言える場面である。

また、かぶを育てているおじいさんの気持ちを考えるときに、教科書は「あまい　あまい　かぶになれ」という表記であるが、教師が朗読して子どもに聞かせる際には、「あまーい、あまーい、かぶになれ」と、かなり抑揚をつけて、その意味理解を促進している活動があった。一人一人に口声模倣させて、子ども自身の身体の感覚経験により理解させる指導法である。生活場面での既知の経験と重ねあわせていくという、具体的な経験を使って授業内容を理解させる教授法と言える。広い意味で、生活言語を用いて学習言語の理解へ導くという考えに近いものと思われる。

授業をどのような観点で検討するかということでは、小学校・中学校・高等学校の教科指導の概念図試案（図７）を作成した。教科の指導においては、次のような実態がある。

① 教師（先生）がいる。
② 児童（生徒）がいる。
③ 教材としての教科書がある。
④ 授業には、導入がある。
⑤ 授業には、内容を理解させる授業の展開がある。
⑥ 教材を理解させるための発問がある。
⑦ 教師は、教科の目標の達成に務める。
⑧ 目標達成のために、児童の実態を踏まえた指導計画を練る。
⑨ 教師は、児童に考えさせたいこと練る。
⑩ 児童相互のやりとりがある。
⑪ 児童の言葉の背景には、子どもの経験や生活がある。
⑫ 板書により思考の整理が行われる。

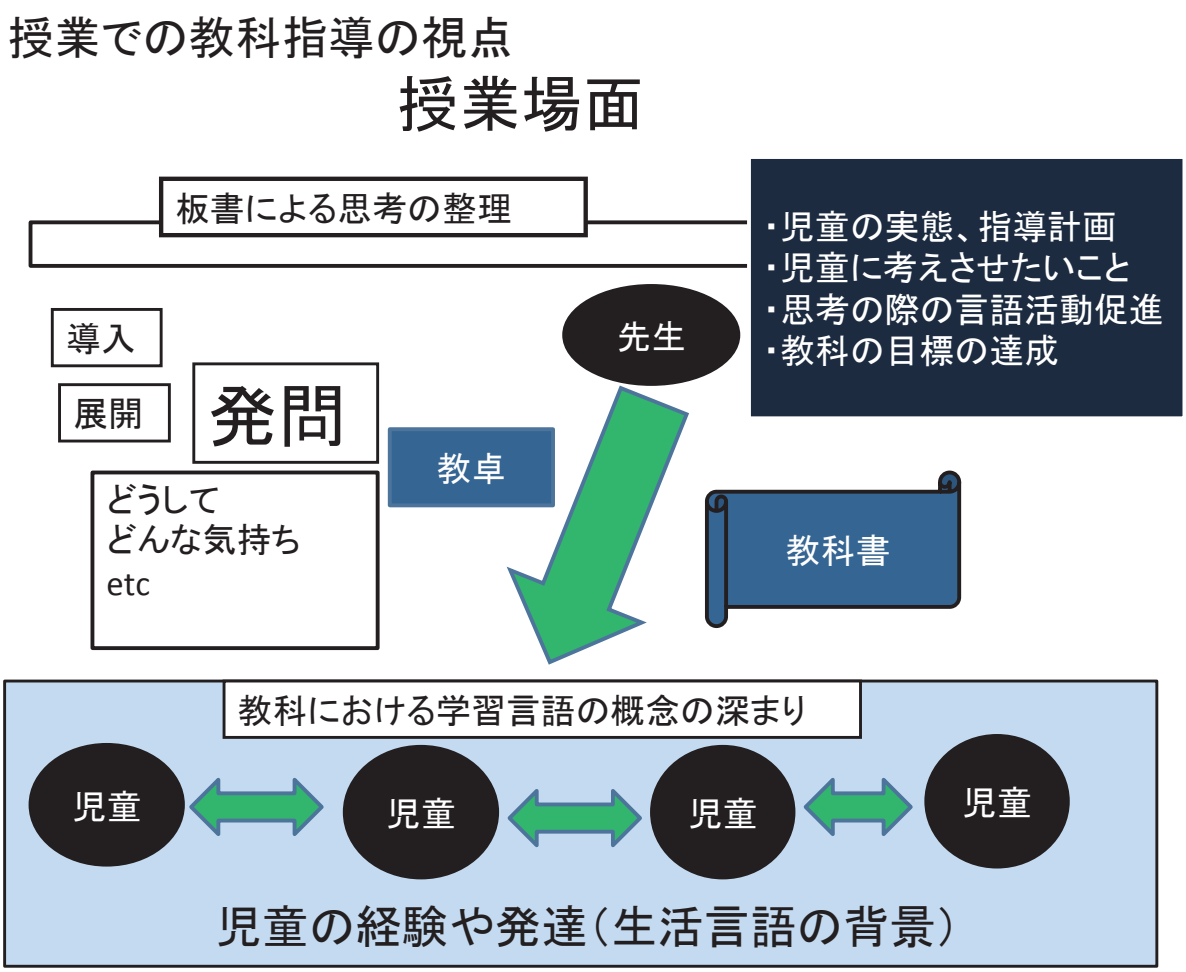

図７　授業での教科指導の視点（概念図試案）

以上のように概念図を整理すると、生活経験をもとに、学習語彙への理解の導きがあることが見えてくる。ここで、今回の研究の目的である、障害のある子どもに視点をうつすと、授業の見え方が、少し異なってくる。図８に、児童の脳の処理からみた概念図試案（図８）を作成してみた。図８は、授業の中にやりとりされる音声や視覚に関係する情報が、どのように認識されるかという視点で整理ができた。本時の「おおきなかぶ」を念頭に、授業を観察してみると、次のような整理ができる。なお、子どもの思考に関する表現は推測したものである。

① 教師の音声で説明が行われる。
② 児童は、自分の耳に届いた教師の音声を脳で聞き取って、言語の意味理解などの処理を行っている。
③ 教科書という印刷物から見えてくるインクの色や形から、文字や絵の意味を自己の経験に照らし合わせて、絶えず視覚情報の認識活動を行っている。
④ 小学校の１年生の１学期は、教科書は分かち書きである。話し言葉と、教科書の書き言葉の照合については発達の途上であり、一度に処理できる情報量には個人差がある。
⑤ 自分の机の周りには、ガタガタという椅子の音や、口々にしゃべる友達の声があり、その中から「先生の声」を聞き逃してはいけないと、がんばっている。

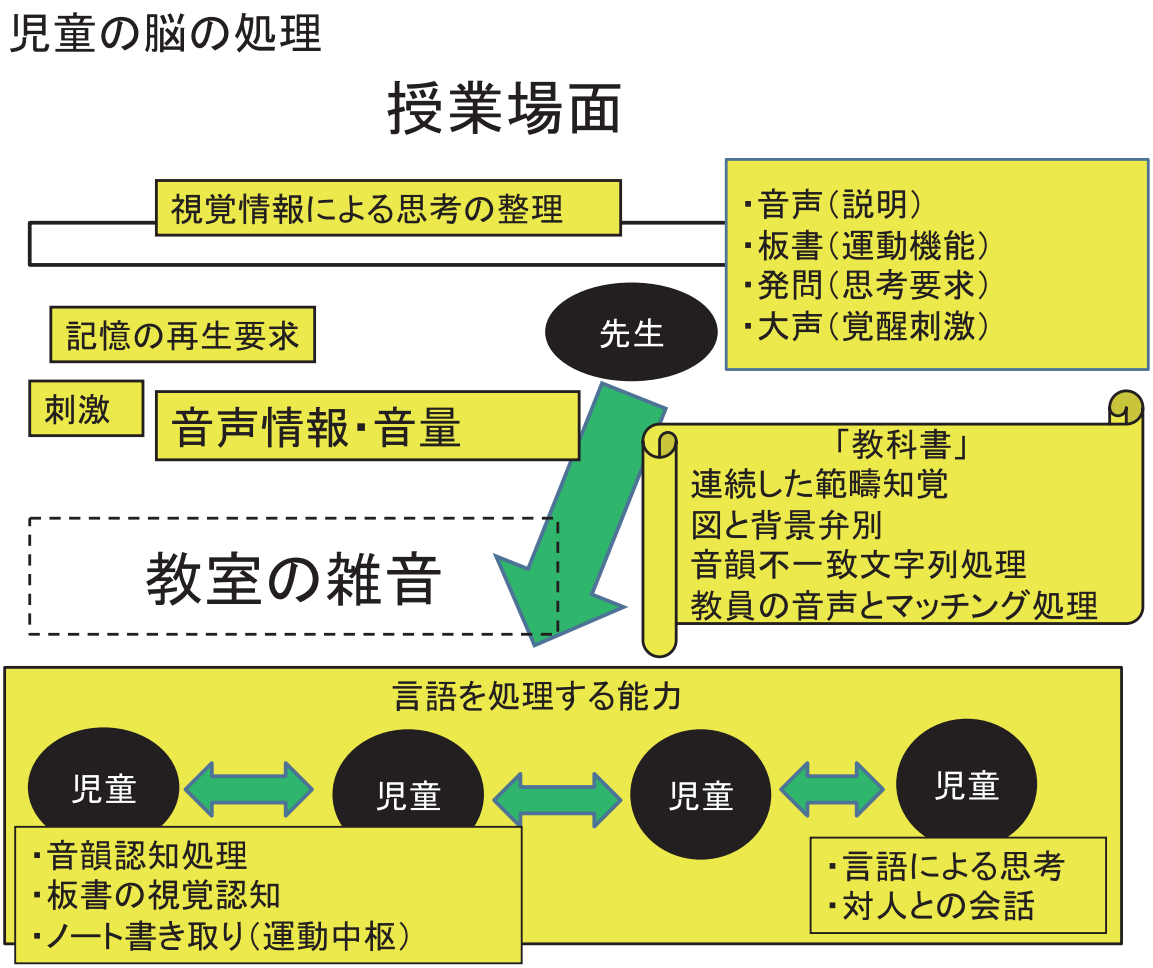

図８　児童の脳の処理からみた授業の場面（概念図試案）

⑥　教科書のなかに、今まで聞いたことのない『とてつもない』がある。
⑦　音読は、教科書の文字を追いかけながら、自分の声を自分で聞き取って、周囲の人のスピードや読み方とちがっていないか、など、常に意識して声を出している。
⑧　先生は、時々、大きな声を出したり、やさしく「あまーい」と言っているけど、これは、どういう気持ちがあるのだろうと考えている。

このように脳の処理から授業を考えていくと、子どもが教科指導に入る以前に、聞く能力や、話す能力、読む能力が十分に備わっているかという危惧が持たれる。個々の子どもの言語発達や生活経験によって、授業の中での説明や質問に使用される言葉の意味や、朗読の音声・音量に込められた内容を、十分に理解できない可能性があるからである。

今回の基礎的研究を進めていく中で、小学校１年生の授業での「学習言語」の具体的な内容を理解するうえで、子ども自身の中に「どの程度の生活言語や言語を処理する能力が育っていないといけないのか」という課題が視野に入ってきた。具体の授業の中での「学習言語」に関する状況の検討を積み重ねていくことで課題の解決に迫りたい。

最後に、「学習言語」に接近する研究方略を見いだす際に、研究協力者として音声言語医学面からの助言を頂いた国際医療福祉大学の前新直志准教授、聴覚言語学的視点で授業分析に助言を頂いた大阪河﨑リハビリテーション大学の國末和也准教授に深く感謝を申し上げます。

引用文献
1）甲斐睦朗監修：小学校国語「語彙指導の方法」語彙表編 . 光村図書 ,2005
2）「新レインボー小学国語辞典改訂第３版」. 金田一春彦他監修 . 学研教育出版 ,2010
3）「チャレンジ小学国語辞典第四版」. 湊吉正監修 . ベネッセコーポレーション ,2010
4）「例解小学国語辞典第四版」. 田近洵一編集 . 三省堂 ,2009
5）「小学国語新辞典第三版」. 宮腰賢監修 . 旺文社 ,2010
6）「例解学習国語辞典第八版」. 金田一京助編 . 小学館 ,2008
7）「学習新国語辞典第三版」. 馬淵和夫監修 . 講談社 ,2009
8）太田垣朋子：「教科学習のための指導に関する一考察－年少日本語教育の立場から－」日本語教育論集 13 号 . 国立国語研究所日本語教育センター ,1997
9）「新編　あたらしいこくご　1 年上」教師用指導書　指導編 . 東京書籍

参考文献
1）「教育基本語彙の基礎的研究－増補改訂版」. 国立国語研究所 ,2009
2）「分類語彙表　増補改訂版」. 国立国語研究所. 大日本書籍 ,2004
3）「小学校国語　学習指導書 1 上　かざぐるま」. 光村図書 ,2005
4）「新教育基本語彙」. 坂本一郎 . 学芸図書 ,1984
5）「ひろがることば　しょうがくこくご 1 上」. 教師用指導書別冊 . 教育出版 ,2007
6）「日本語学キーワード事典」. 小池清治他編集 . 朝倉書店 ,2001
7）「小学校指導書　国語編」. 文部省 ,1989
8）「小学校学習指導要領解説　国語編」. 文部省 ,1999
9）「小学校学習指導要領解説　国語編」. 文部科学省 ,2008
10）学校教教育法第 33 条及び 34 条

専門研究 D 研究組織
障害のある子どもの学習言語に関する基礎的研究
―授業で使用される教科書及び指導者が使用する言語の把握―（平成 21 ～ 22 年度）

研究代表者
企画部　総括研究員　　藤本　裕人

所外研究協力者
国際医療福祉大学
保健医療学部言語聴覚学科　准教授　　前新　直志

大阪河﨑リハビリテーション大学
リハビリテーション学部言語聴覚学専攻　准教授　　國末　和也